

第十三代

良如宗主伝

近世本願寺の礎を築いた宗主

二〇二二年、春の法要において本願寺第十三代良如宗主の三百五十回忌をお勤めするに当たり、良如宗主のご事跡に触れ、そのみ跡を偲ばせていただきます。

良如宗主の経歴

良如宗主は、本願寺第十二代准如宗主の次男として、慶長十七（一六一二）年十二月七日に誕生しました。母は祇園宝光院の息女（寿光院准勝）でした。

童名を茶々丸といました。茶々丸

には兄阿茶がいましたが、慶長十四年には六歳で没していたため、准如宗主は慶長二十（一六二五）年四月二十八日、当時四歳であった茶々丸に讓状を認め、次期宗主を決しました。

寛永二（一六二五）年二月二十一日、茶々丸は九条忠榮の息女通君（貞梁院如高）と結婚します。これは本願寺が摂家から妻を迎えた最初です。

茶々丸は寛永三（一六二六）年四月十九日、十五歳で得度、諱を光円、法名を良如と称し、九条忠榮の猶子となりました。得度後、同年六月二十六日に直叙法眼、ついで十二月十八日に大僧都、翌四年八月十四日に僧正となり、僧位僧官を進めました。寛永七（一六三〇）年十一月三十日に准如宗主の病没にともない十九歳で継職。そして寛永十五年十一月二十一日に大僧正となりました。

妻である如高が寛永九年十二月二十三日に没したため、良如宗主は改めて寛永十七年十二月二十四日に八条宮智仁親王の妹梅宮（珠香院如室）と結婚しました。

梅宮は後水尾天皇中宮の東福門院和子（將軍徳川秀忠の息女）の猶子として入興しました。しかし梅宮は慶安三元（一六四八）年七月二十六日に宗主の母准勝が没したのに引き続き、同年八月十七日に没しました。

慶安四（一六五二）年六月二十八日に、良如宗主四十歳にして房曆（のち第十四

代寂(しやく)如(にょ)主(しゆ)が誕生(たうじん)します。房(ぼう)曆(りやく)は万(まん)治(ぢ)四(し)(寛(かん)文(ぶん)元(げん)、一(いち)六(ろく)二(に))年(ねん)三(さん)月(げつ)七(しち)日(にち)、十(じゅう)一(いち)歳(さい)で得(とく)度(た)、諱(ごう)光(こう)常(じょう)、法(はふ)名(めい)寂(じやく)如(にょ)と称(しょう)しました。

晩(ばん)年(ねん)、良(りやう)如(にょ)宗(しゆ)主(しゆ)はオランダより輸(いん)入(にゅう)した眼(がん)鏡(きやう)を長(なが)崎(さき)から取(と)り寄(よ)せたことが、近(きん)年(ねん)の研究(けんぎゆ)で明(あ)らかになりました。おそらく晩(ばん)年(ねん)、宗(しゆ)主(しゆ)は目(め)を悪(あく)くしていたと考(かん)えられます。

そして宗(しゆ)主(しゆ)は寛(かん)文(ぶん)元(げん)年(ねん)三(さん)月(げつ)の宗(しゆ)祖(そ)四(し)百(ひゃく)回(かい)忌(ぎ)法(はふ)要(やう)中(ちゆう)から病(びやう)氣(き)がちになり、翌(あ)二(に)年(ねん)七(しち)月(げつ)下(げ)旬(じゆん)にまた病(びやう)臥(が)したため、八(はち)月(げつ)二(に)十(じゅう)七(しち)日(にち)に寂(じやく)如(にょ)新(しん)門(もん)に式(しき)文(ぶん)を授(ま)げ、二(に)十(じゅう)八(はち)日(にち)

日(にち)に祖(そ)典(てん)および宗(しゆ)要(やう)を伝(でん)えました。九(く)月(げつ)四(し)日(にち)に終(しゆう)焉(えん)を自(じ)覚(かく)して和(わ)歌(か)を詠(よ)み、九(く)月(げつ)七(しち)日(にち)示(じ)寂(じやく)しました。

享(きやう)年(ねん)五(ご)十(じゅう)一(いち)歳(さい)。教(きやう)興(こう)院(いん)と諡(おくりな)され、九(く)月(げつ)十(じゅう)八(はち)日(にち)に茶(た)毘(び)に付(つ)され、遺(い)骨(こつ)は大(だい)谷(たに)本(ほん)廟(びやう)の准(じゆん)如(にょ)宗(しゆ)主(しゆ)墓(ぼ)の南(なん)に納(な)められました。

良如宗主の時代

徳(とく)川(がわ)幕(まく)府(ふ)は将(しやう)軍(ぐん)を中(ちゆう)心(しん)に権(けん)力(りやく)集(しゆ)中(ちゆう)を凶(きゆう)るため、仏(ぶつ)教(きやう)教(きやう)団(だん)や民(たみ)衆(しゆ)に對(たい)して、法(はふ)度(た)を発(はつ)布(ふ)、諸(しよ)制(せい)度(た)を整(ちゆう)備(び)して本(ほん)末(まつ)制(せい)の強(きやう)化(か)や統(とう)制(せい)、民(たみ)衆(しゆ)支(し)配(はい)の体(たい)制(せい)化(か)を指(さ)して



良如宗主影像 (龍谷大学大宮図書館所蔵)

ました。寛(かん)永(えい)十(じゅう)(一(いち)六(ろく)三(さん))年(ねん)、本(ほん)願(がん)寺(じ)は幕(まく)府(ふ)の命(めい)により本(ほん)末(まつ)帳(ちやう)を提(てい)出(しゆ)つ。これにより本(ほん)末(まつ)関(かん)係(けい)が明(めい)確(かく)化(か)され、本(ほん)山(さん)を中(ちゆう)心(しん)とする中(ちゆう)央(やう)集(しゆ)権(けん)的(てき)体(たい)制(せい)を確(かく)立(りつ)します。

民(たみ)衆(しゆ)支(し)配(はい)について、キリシタン禁(きん)制(せい)にともない檀(だん)那(な)寺(じ)が檀(だん)家(か)の宗(しゆ)旨(し)を証(しやう)明(めい)する寺(じ)請(けい)を求(もと)め、寛(かん)永(えい)十(じゅう)一(いち)年(ねん)に寺(じ)請(けい)による宗(しゆ)門(もん)改(か)帳(ちやう)の作(さく)成(せい)が制(せい)度(た)化(か)され、寺(じ)院(いん)(檀(だん)那(な)寺(じ))と門(もん)徒(た)の家(け)(檀(だん)家(か))との寺(じ)檀(だん)関(かん)係(けい)が事(じ)実(じつ)上(じやう)制(せい)度(た)化(か)されます。このため中(ちゆう)世(せい)の念(ねん)仏(ぶつ)により寺(じ)と門(もん)徒(た)が結(むす)ばれた関(かん)係(けい)から、本(ほん)願(がん)寺(じ)配(はい)下(げ)の各(かく)寺(じ)院(いん)と門(もん)徒(た)の葬(さう)儀(ぎ)・年(ねん)忌(ぎ)を中(ちゆう)心(しん)とする関(かん)係(けい)への移(うつ)行(ぎやう)が明(めい)瞭(りやう)となりました。

さらに寛(かん)永(えい)十(じゅう)二(に)年(ねん)十(じゅう)一(いち)月(げつ)、幕(まく)府(ふ)および各(かく)藩(はん)に宗(しゆ)教(きやう)行(ぎやう)政(せい)を担(たん)当(たう)する寺(じ)社(しゃ)奉(ほう)行(ぎやう)が設(せつ)置(ち)され、その命(めい)令(れい)を受(う)領(りやう)し配(はい)下(げ)寺(じ)院(いん)に通(つう)達(たつ)する機(き)関(かん)として触(ふ)頭(づ)が置(ち)かれます。とくに幕(まく)府(ふ)の命(めい)令(れい)を受(う)ける触(ふ)頭(づ)には各(かく)宗(しゆ)の江(え)戸(と)所(じよ)在(ざい)の有(いう)力(りやく)寺(じ)院(いん)が任(にん)じられ、本(ほん)願(がん)寺(じ)では浅(あさくさ)草(くさ)御(ご)堂(だう)(浜(はま)町(ちやう)御(ご)坊(ぼう)、のちの築(つき)地(ぢ)別(べつ)院(いん)「現(げん)、築(つき)地(ぢ)本(ほん)願(がん)寺(じ)」)が担(たん)当(たう)し録(ろく)所(じよ)と称(しょう)しました。触(ふ)頭(づ)は幕(まく)府(ふ)・藩(はん)の命(めい)令(れい)ばか



六字名号（良如宗主筆 本願寺所蔵）

りでなく、本山の布令をも下達し、また末寺から寺社奉行や本山へ上申する文書を取り次ぐ任務も帯びていました。

良如宗主の時代は、このように幕府の宗教政策が確立していく時期であったのです。次に良如宗主の主な業績を述べていきたいと思います。

良如宗主の主な業績

1 御影堂の再興

元和三（一六一七）年十二月二十日の火災で阿弥陀堂・御影堂は焼失しました。阿弥陀堂は准如宗主の代で再建を遂げましたが、御影堂の本格的着手はな

れないままでした。良如宗主の代とな

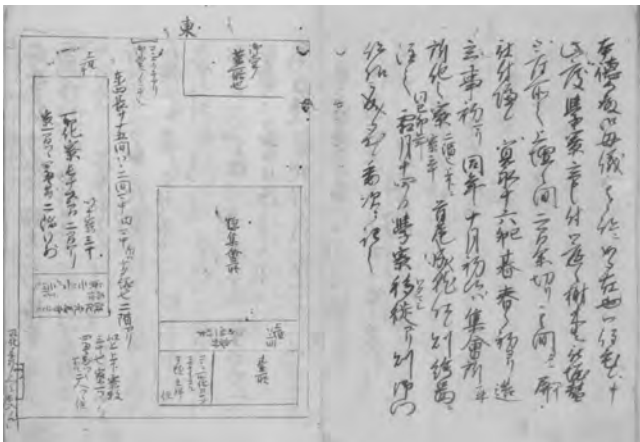
た寛永十（一六三三）年六月十一日、ようやく御影堂再興の鉦始があり、寛永十二（一六三五）年七月二十六日に立柱、寛永十三（一六三六）年八月二日に上棟し、同年八月十九日に阿弥陀堂に安置されていた御真影が遷座されました。これが現在の御影堂（重文）です。

2 学寮創設と承応の閲牘

寛永十六（一六三九）年春、阿弥陀堂の北に学寮（学問所）の造立が始められ、十一月十四日に良如宗主が落成慶讃の法要を親修しました。翌年四月十五日河内出口（枚方市）光善寺准玄を講

主（能化）として『和讃』が講じられました。ここに現在の龍谷大学に継続発展する学寮が発足するのです。

江戸時代前期は、幕府が武断政治から文治政治（武力ではなく学問で治世すること）に舵を切る時期に当たっています。良如宗主はこの来るべき文治時代の気配を先んじて感じ取り、教団の発展をそこに見いだしたのでした。



学寮見取図〈学寮造立事より〉（龍谷大学大宮図書館所蔵）



築地別院図（龍谷大学禿氏文庫所蔵）

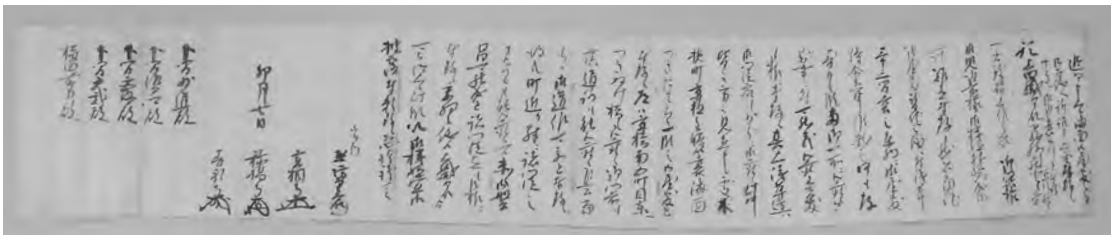
しかし承応二（一六五三）年二月八日、熊本延寿寺月感（明了）が能化西吟の教学や行状を本願寺へ訴えて、教学的論争となりました。さらに興正寺准秀は親戚関係にあった月感を支持するに至り、事態は本願寺と興正寺との紛争に発展しました。

そして幕府の裁断を仰ぐことになり、

問題の解決は、本願寺と友好な関係にあった、譜代大名筆頭彦根藩主井伊直孝に委ねられました。直孝は宗主に事件の契機となった学寮の破却を要求、宗主は拒否しましたが、直孝の強い説得に、明暦元（一六五五）年七月十九日、学寮を破却しました。そして幕府は准秀を越後（新潟県）今町へ、月感を出雲（島根県）玉造へと、それぞれ逼塞に処し、法論は終息しました。この事件を承応の鬨牆といえます。

3 築地別院の建立

明暦三（一六五七）年正月十八日、明暦の大火で江戸浅草御堂は類焼しました。そこで再建のため、五月四日に幕府から代替地と



寺内惣坊主衆・善永寺外二人書状（本願寺史料研究所保管）

して、八丁堀築地の外に海上方百間を寄進されました。従来、幕府より海上という悪地を押しつけられたといわれてきましたが、事実はそうではなく、この海上の地は江戸の寺院や惣坊主衆や諸門徒みずからが選択したことが、近年、新たな史料（寺内惣坊主衆・善永寺外二人書状）により明らかになっています。

そして折しも摂津（大阪市）から移住していた佃島の門徒が埋め立てに当たり、明暦四（万治元、一六五八）年には仮御堂を建立し、五月二十七日に本尊の移徙がなされました。ここに現在に至る築地別院が始まったのです。

4 宗祖四百回忌の厳修

良如宗主は明暦三（一六五七）年五月十日、本山御堂廻

りおよび大谷本廟などの普請を図り、そして寛文元（一六六一）年三月十八日連夜から十昼夜にわたり、宗祖四百回忌を厳修しました。この法会に先立ち寂如新門主の得度式も行われました。法会にあわせて四幅の絵伝が現在のように八幅に改められ、南北両方に四幅ずつ安置されるようになります。公家の参列者も多く、法会参列者は三千人以上を数えました。

そして、結願の二十八日には良如宗主・寂如新門をはじめ、一家衆その他出勤の衆僧が本願寺から大谷本廟へ参り、新仏殿及び廟所へ参詣しました。大谷本廟には在家門徒も群参し大混雑しました。宗祖四百回忌法要はたいへんな盛儀のなかに執り行われたのでした。

近世本願寺の礎を築いた宗主

良如宗主の生きた時代は、戦国時代の武断政治がまだ支配的で、ようやく文治政治へと向かう時代でありました。した

がって幕府への対応を誤れば、取り潰しに遭う時代でもあったのです。

宗主は幕府との関係調整で生涯十三回江戸へ赴いています。その目的は、主に将軍代替わりなど将軍家への礼節ですが、教学論争に端を発する興正寺との対立、浅草御堂の再建（築地別院）問題、これらへ対処すべく幕府と交渉を行うためでもありました。

次代の寂如宗主が継職後六回と減少していることに比較しても、良如宗主がいかに幕府との対応に腐心し、その危機を乗り切ってきたかがよくわかります。良如宗主は本願寺の存続と発展に尽力した、まさに近世本願寺の礎を築いた宗主であったのです。

（本願寺史料研究所上級研究員 大喜直彦）

※本編は「宗報」二〇二二年三月号に掲載された内容を一部編集したものです。